

ペレストロイカ期におけるコリョ・サラムのアイデンティティ形成 ——1986年～1991年の『レーニン・キチ』の分析から——

李 眞恵*

Identity Formation of the Korean Diaspora in USSR, Koryo-saram, in Perestroika Period:
An Analysis Based upon Articles of *Lenin Gichi*, 1986 to 1991

LEE Jinhye

This paper focuses on the discourse surrounding ethnic regeneration during the *Perestroika* (перестройка) period of the former Soviet Union and considers the development and nature of this discourse through case study analysis of the *Koryo-saram* (the Korean diaspora of the former Soviet Union) and its newspaper, *Lenin Gichi* (The Flag of Lenin). The case study in this paper reveals a focus on independent approaches to ethnic regeneration within *Koryo-saram* society during the *Perestroika* period. Although during the Soviet era all *Koryo-saram* were Soviet citizens, they were “nationalized” by the respective countries of the former Soviet Union following its collapse. As opposed to the national integration process on the basis of nationalism of the title nation of each country, the *Koryo-saram* societies of each country transformed, while responding in various ways to the governments and systems that had acquired their own individual characteristics. In order to study the dynamics of modern *Koryo-saram* society, it is undoubtedly necessary to consider the transformation of *Koryo-saram* society after the collapse of the Soviet Union. Therefore, the objective of this paper is to focus on the changes in the *Koryo-saram* society during the *Perestroika* period, which was a crucial turning point in its transformation, and investigate and analyze the response of *Koryo-saram* society to *Perestroika*.

I. はじめに

コリョ・サラム¹⁾とは、旧ソ連地域におけるコリアン・ディアスポラを指す[高全 2007: 367]。本論は、ペレストロイカ(перестройка)²⁾期のソ連における諸民族の民族再生のための言論活動に着目し、コリョ・サラムと彼らの新聞である『レーニン・キチ』³⁾の分析を事例に、その展開と実態について考察するものである。コリョ・サラムは、ソ連時代には皆がソ連国籍者だったが、ソ連崩壊後、旧ソ連地域いずれかの国の国籍を持つことになったのである。諸国の主幹民族⁴⁾中心の国民

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 1863年に、朝鮮半島からロシア極東に移住し、1937年にスターリンにより強制移住させられ中央アジアに定着し、ソ連崩壊後独立した旧ソ連諸国の国籍を持っているコリアン・ディアスポラを指す。「コリョ・サラム」という名称はコリョ・サラム自らが名づけたものである。「コリョ・サラム」の「コリョ」を漢字で表記すると、「高麗」であり、「サラム」を日本語に訳すと「人(ひと)」である。コリョ・サラムの特徴についてはII章を参照。

2) ‘再建’または‘建て直し’という意味のロシア語。

3) コリョ・サラム新聞であり、代表的な言説機関である。現在、新聞は『高麗日報』のタイトルで刊行されており、そのタイトルで呼ぶべきであろうが、本論の分析時期であるペレストロイカ期の新聞のタイトルが『レーニン・キチ』であったため、本論では『レーニン・キチ』という名称を使うことにする。詳細についてはII章を参照。

4) 国名にその名称を冠し、その国で主たる国民と想定されている民族のこと。例えば、カザフスタンの例ではカザフ人が主幹民族である。

統合に対して、各国のコリヨ・サラム社会は、それぞれに特性を有するようになった政府や制度に様々な対応をしながら変容している。現代コリヨ・サラム社会の動態を研究するためにはまず、ソ連崩壊前後のコリヨ・サラム社会の変容について考察する必要がある。従って、本論の目的は、時期的に変容の契機になったペレストロイカ期のコリヨ・サラム社会に注目し、ペレストロイカに対するコリヨ・サラム社会の対応を検討・分析することである。

1. 背景と位置づけ

ペレストロイカは1985年3月、ゴルバチョフ⁵⁾がソ連共産党書記長に就任した後、ソ連の経済における病弊の危機に経済効率を向上させるために着手した改革政策である。ソ連体制の最も大きな欠点は民主主義の欠如とみなされ、その解決策とは社会諸分野での民主化を拡大させることであった。従って、経済改革から経済制度の民主化を実現、市場経済の要素の導入の必要性が提起された〔高橋1990: 207〕。さらに、ペレストロイカの柱のひとつはグラスノスチ(гласность)⁶⁾であり、グラスノスチは既成の新聞・雑誌における言論の自由の拡大からはじまった。1990年6月12日、ゴルバチョフは連邦最高会議が採択した法律「新聞及びその他のマス・メディアについて」⁷⁾を公布した。その法律により言論の自由は法制化され、検閲の廃止が宣言されたのである。このように新聞・雑誌を中心に、言論の自由が法によって保障・実現される社会的な雰囲気の中で、諸民族の言論活動は活発に行われた。グラスノスチ以降、隠された民族抑圧の実態が明らかにされたため、それが各民族意識を高める要因になり、諸民族の言論活動は多様な形で噴出した。従って、その時期には、ソビエト人民という強いられた普遍的な超民族性を否定し、諸民族は民族的アイデンティティを確保しようとする活動が見られた。諸民族の構成員たちは民族の文化団体の結成を通じて民族ネットワークを構築し、民族共同体の新しい結束をなしたのである〔Lee 2012: 54〕。

一方、当時、コリヨ・サラムは彼らの代表的な言論の場である『レーニン・キチ』を中心に活発な言論活動を行った。『レーニン・キチ』新聞は、ペレストロイカ開始以前はソ連共産党の宣伝の道具として機能していたが、ペレストロイカ以降には改革の波によって主体的・自覚的な民族団体へと変化を遂げ、コリヨ・サラムのネットワークを先導したのである。

本論では、ペレストロイカにおける諸民族の民族再生のための言論活動の活発化を背景として、その事例に即して、コリヨ・サラムの新聞である『レーニン・キチ』の分析を行ない、その展開とコリヨ・サラム社会の変容の実態について論じたい。

2. 先行研究と本研究の視座

本論が事例とするコリヨ・サラムは、スターリン時代のソ連という強圧的な体制の下で強制移住させられ、ソ連崩壊に伴い、旧ソ連諸国が独立するまで、少数民族として政治的・社会的差別を受けながら、徹底的に体制志向的で体制同化的な生活を余儀なくされてきた。

これまでのコリヨ・サラム研究は、沿海州への移住と中央アジアへの強制移住を軸にした民族移動史を中心に行なわれてきた。たとえば、沿海州への移住とそこでの生活や日本からの独立運動、

5) ミハイル・セルゲエヴィチ・ゴルバチョフ(Михаил Сергеевич Горбачёв, 1931年生まれ)。

6) 「情報公開」という意味のロシア語。情報公開に関するゴルバチョフの改革政策の一つである。

7) この法律の第一条は、次のように「新聞の自由」についてである。「第一条 新聞の自由 新聞及びその他のマス・メディアは自由である。ソ連憲法によって保障された言論の自由と新聞の自由は、新聞及びその他のマス・メディアを含め、いかなる形態においても、意見と信条を表明し、情報と思想を探求し、選択し、受容し、流布する権利を意味する」〔和田1990: 70〕。

スターリンによる強制移住、中央アジアへの定着過程、ソ連崩壊後の再移住などのような歴史的な研究に大きな関心が集中してきた。

コリヨ・サラム研究は、ソ連の研究者により冷戦体制下でのソ連政府の民族統合政策の報告や分析から始まり [Levin 1949, 1958; Джарылгасинова 1960, 1969; Ионов 1960, 1964, 1968, 1969]、それに対して西側の学者らにより、ソ連の民族政策に対する法学的・歴史学的側面での批判的研究が展開された [Ginsburgs 1976; Stephan 1978, 1992, 1994]。その後、コリヨ・サラムの移住史の充実に加えて、コリヨ・サラムの言語・慣習・アイデンティティ・歴史などの研究が行われてきた [Wada 1987; Kho 1987; 高(ゴ) 1990; 岡 1998; Oka 2000; 李 1999, 2002; King 2001a, 2001b; Kim 2000; Kim 2001, 2003]。その中で『レーニン・キチ』記事の分析を活用した研究者は、高(ゴ) [1990] である。

しかし、彼らの研究は全般的にコリヨ・サラムの移住史を軸にした成果にとどまっているといえよう。ソ連崩壊後、主権国になった旧ソ連諸国の変化、すなわち主幹民族中心の国民統合過程の状況と、その中でコリヨ・サラム社会の動態を実証的に研究する試みは十分ではなかった。そのような研究の空白分野に、数は少ないが、持続的に文学・人類学・社会学・地域研究の専門家が挑んでいる [김필영(キム・ピリョン) 2004; 임영상(イム・ヨンサン) 2011; 김상철(キム・サンチョル) 2012]。本論では、既存研究を把握したうえで、政府の制度やシステムによるコリヨ・サラム社会の対応と変容に着目する。特にベレストロイカ期にグラスノチの波のなかで、コリヨ・サラム社会は、どのように変容していたかに注目し、『レーニン・キチ』掲載記事からその展開と実態を検討することを試みる。

II. コリヨ・サラムと『レーニン・キチ』

1. コリヨ・サラムは何者か？

コリヨ・サラムの特徴として二つの点があげられる。まず、一つ目は、彼らの名称が自らの名づけであったことである。冒頭に述べたように、「コリヨ・サラム」とは、旧ソ連地域におけるコリアン・ディアスポラである。例えば韓国では、韓国人は自らを「韓人(ハニン)」または「韓国人(ハングギン)」と呼び、北朝鮮では自らを「朝鮮サラム」と呼ぶ。また、「韓人」を英語で表記すると「Korean」であり一つの単語で呼ばれている。一方、韓国では「在外韓人」、すなわち祖国を離れたコリアン・ディアスポラに対しては、国ごとに違う呼称が用いられている。アメリカのコリアン・ディアスポラは「在米韓人」または「在米同胞」、在日本であれば「在日韓人」あるいは「在日同胞」、在中国であれば「朝鮮族」と呼ばれる [Lee 2012: 9]。旧ソ連地域、すなわちロシアと中央アジアに居住するコリアン・ディアスポラは、「コリヨ・サラム(Корё сарам)」または「高麗人」と呼ばれる。外部から名づけが行われた他のコリアン・ディアスポラに対して、「コリヨ・サラム」は自発的な自己認識をしたうえで自らを「コリヨ・サラム」と呼び始めた結果、その名称が外部によっても受容されており、この呼称の由来はコリヨ・サラムの主な特徴であるといえよう [Kim 2000: 77]。

現在、コリヨ・サラムの中には、社会的・経済的な背景が異なる人々が混在している。たとえば、カザフスタン・コリヨ・サラムには、1937年のスターリンによる強制移住によってそこに定着した者、1953年にスターリンが死亡してコリヨ・サラムに自由旅行が許可された後に移住し比較的安定的な生活をしている者、ソ連崩壊後に経済活動の目的でロシア極東またはその他の旧ソ連国から移住してきた者など、彼らはそれぞれの社会の中で「分類」され、彼らの呼称⁸⁾も、彼らが持っている

8) たとえば、ロシア沿海州に住んでいるコリヨ・サラムの中には、ソ連崩壊以前から住んでいる「토막이(トバギ、

るアイデンティティも異なる。このような現象は、コリョ・サラムの歴史的経験が移住と流浪の連続であったがゆえのものである。移住と定着の繰り返しを経験しながら多様なアイデンティティを持つことになった、コリョ・サラムは歴史上4回の大移住を経験してきた[召彦尊(キム・ホジュン)2013: 14]。これがコリョ・サラムの特徴の二つ目であるといえる。

コリョ・サラムの1回目の移住は、朝鮮半島から沿海州への移住である。コリョ・サラムの歴史は、沿海州コリョ・サラムから始まる。沿海州コリョ・サラムの祖先は、朝鮮王朝の時代に移住し1863年ティジンへ(地新墟)⁹⁾に定着したコリョ・サラムである。移住民の継続的な増加で、1882年の沿海州は、ロシア人よりコリョ・サラムが多くを占めた。彼らの80%以上は農業に従事し安定的な生活を営んできた。日本統治下には、3万人以上のコリョ・サラムが朝鮮国籍の代わりにロシア国籍を選択した[召彦尊(キム・ホジュン)2013: 50]。その時に国に戻れなくなったコリョ・サラムにとってロシアは2番目の祖国となった。1937年に強制移住されるまで、沿海州は彼らの生活や抗日運動の拠点であった。

2回目の移住は1937年スターリンにより実施された中央アジアへの強制移住である。コリョ・サラムを日本のスパイと見なし、ソ連人民の敵と見なされた18万のコリョ・サラムは、一挙に中央アジアへ移住させられた[李2002: 53]。コリョ・サラムの強制移住は、9月初旬から12月末まで第1次は国境地域居住のコリョ・サラム、第2次は内陸居住のコリョ・サラムを対象に、合計2回に分けて行われた。1937年9月9日の夜、コリョ・サラムを乗せた輸送列車がウラジオストクを離れ、3-4週間後に目的地に到着した。最初の到着地はカザフスタンのウシュトベ(Уштобе)だった。ついでアルマトウ(Алматы)、クズルオルダ(Кзылорда)、カラガンダ(Караганда)に、そして10月初旬にはウズベキスタン国境地域に到着した。コリョ・サラムを乗せた列車が走った距離は6000km、10月末まで列車124両による第一次輸送が完了した際には移住民は3万6442世帯の17万1781人に達した。その中で、2万170世帯の9万5256人がカザフ共和国に、1万6272世帯の7万6525人かウズベク共和国に降りることになった。その後輸送された4700人以上の人数を含めば、強制移住されたコリョ・サラムの人数は総計約18万人に達する[召彦尊(キム・ギョンテ)2015: 69]。

3回目の移住は、1953年スターリン死後中央アジア・コリョ・サラムに自由旅行が許可された際の個別的な分散移住である。若いコリョ・サラムが教育や職業などの理由でスラブ文化圏であるロシア、ウクライナ、ベラルーシなどへ移住した。その後コリョ・サラムの生存基盤が西部ロシアまで拡散された。ウズベク共和国・コリョ・サラムは主にモスクワやレニングラードへ留学のため移住した人数が多かった。カザフ共和国・コリョ・サラムは、工業中心都市やカザフ共和国と接するシベリアの科学・工業都市へ再移住した。都市に基盤を固めたコリョ・サラムは親戚や親族らを都市へ呼び入れた[召彦尊(キム・ホジュン)2013: 391]。

4回目の移住は、1991年ソ連崩壊後、旧ソ連諸国の独立に伴って高揚した各国の民族主義のため、約10万人のコリョ・サラムが再び流浪の道へ歩き始めたものである。旧ソ連諸国の民族主義が原因になったこの大移動は、初期においてはロシアへの再移住が大きな流れだった。その結果、

日本語に訳すると土着民である)、ソ連崩壊後中央アジアから再移住してきた「큰땅치(クン・タン・チ(クン「大きい」、タン「土地」、チ「人(卑語)」))」、第二次世界大戦後ロシアサハリンから移住してきた「화태치(ウァテ・チ: ウァテは、日本統治時代に、サハリンを指す地名であったウァテ(樺太)から始まった名称である[정진아(ジョン・ジナ)2011: 409])」などの名称で呼ばれているコリョ・サラムが混在している[召彦尊(キム・ホジュン)2013: 24]。中央アジアでは、たとえば、사할린치(サハリン・チ)、연해주치(沿海州・チ)などのように移住先の地域名に「チ」をつけて呼んでいる(コリョ語学校長のインタビュー(2015年12月24日))。

9) ロシア極東沿海州のウスリー川岸の村の一つであり、ロシアと北朝鮮の国境地域にある。

南部ロシア、北カフカス、ウクライナがコリョ・サラムの新しい生活圏になった。しかし2000年代からコリョ・サラムの韓国での就職とヨーロッパへの移民が始まり、ロシアへの再移住は横ばい状態に入っていた[召근태(キム・ギンテ)2015: 281]。

ソ連崩壊後、旧ソ連諸国は新生独立国家としての主権を持つことになった。ソ連崩壊はコリョ・サラムに移住に対する選択を突きつけた。彼らは、生まれ育った国に残るか、それとも今や彼らの精神的な基盤になったロシア語とその文化があるロシアへ移住するかを決断しなければならなかった。旧ソ連各国別の民族主義の台頭と国家語(state language)や公用語(official language)の規定は、彼らに社会的差別を認識させコリョ・サラム自らも移住を考え始めた[半谷・岡2006: 49]。

2. 『レーニン・キチ』の歩み

コリョ・サラムの歴史は、移住の歴史だといえよう。コリョ・サラム研究で過去と現在の変化を理解するための映像・音声資料、特に人々の証言の記録や資料は、その保存状態が不十分であり、生存者も極めて少なくなっている。しかし、コリョ・サラムの生とともに生き残っている『レーニン・キチ』では、彼らの生活についての記録が確認され、その活用の価値が十分にある歴史的資料だといえる[Lee 2012: 13]。本章では、このような『レーニン・キチ』の歴史的歩みについて概説する。

2.1. 『先鋒(ソンボン)』 *Авангард*

最初の高麗語新聞である『ソンボン』は、1923年3月1日に、ロシア・ウラジオストクで、3・1独立運動¹⁰⁾の4周年を記念するために創刊された『三月一日(サモイリル)』*1 Марта*¹¹⁾というタイトルの新聞を前身とし、その第4号からは『ソンボン』のタイトルとなったものである。『ソンボン』はソ連共産党の機関紙として、1923年に計34回、1924年には週2回、1930年～1931年には週3回、1932年～1935年には隔日で刊行された。発行部数は1928年に2千部、1929年に3千6百部、1930年に6千9百部、1931年以降には既に1万部に達した。しかし、『ソンボン』は1937年9月12日、1644号を最後に強制移住により発行が中止された[Ким Бен Хак 2013: 10]。

2.2. 『レーニン・キチ』 *Ленин кичи*

1937年の強制移住の実施当時、新聞社上部の役員は逮捕され、スターリン政権の弾圧による犠牲となった。『ソンボン』は、強制移住の実施後、約9ヶ月間発行が中断されたが、ロシア極東からカザフスタンのクズルオルダに移住させられた新聞社役員たち¹²⁾によって、『レーニン・キチ』という新たなタイトルのもと、1938年5月15日からシルダリヤ(Сырдарья)地区¹³⁾新聞として毎月15回発行されるようになった。その後、1940年にクズルオルダ州及び市の党委員会と州議会の機関紙という地位が与えられ、わずか2面の紙面ながら発行部数6千部で、週5回発行された。その後、コリョ・サラム社会からの新聞の発行部数、発行回数、紙面サイズの拡大に関する要請により、1954年1月1日、カザフスタン共産党クズルオルダ州及び中央委員会の機関紙として再編され、発

10) 日本の統治下にあった朝鮮各地で1919年3月1日に始まった全土的な抗日・独立運動である。

11) 『三月一日(サモイリル)』*1 марта*の創刊当時の招待主筆は、이성(イ・ソン)であった。

12) 최봉남(チョイ・ボンナム)、지카이알렉산드라(ジガイ・アレクサンドラ)、조발렌찌나(チョ・ヴァレンチナ)などの新聞社役員が極東から、新聞発行の道具を持ってきて保存し、移転させられたクズルオルダ新聞社で新聞を再発行した[Ким Бен Хак 2013: 10]。

13) ロシア語で表記すると район であり、行政区域の単位。

行部数7千部、週5回、発行紙面4面、紙面サイズは『ブラウダ』 *Правда*¹⁴⁾と同じ形で刊行された。

一方で組織面では、1940年までは、新聞社内部に部署の区分は存在していなかった。1949年までには党の生活部・宣伝部・産業部・運送部・農業部・書簡部・労働通信部が、1954年には文化部が組織された。1960年中盤には、産業部と農業部は産業・労働部に、文化部が文化・文学部に、書簡部と労働通信部が書簡・情報部に再編された。1960年には、新聞社職員が60人に増員され、組織的・体系的な言論活動ができるようになった。また、新聞社はウズベク共和国・クルグズ共和国・タジク共和国に特派員を派遣し、ハングルで記事を書ける記者を確保した。それに留まらず、ロシア語で記事を書く他の民族の記者たちとも協力関係を維持していた。

1961年に『レーニン・キチ』は共和国間共同新聞になり、コリョ・サラムが居住している中央アジア諸共和国に配給された。1956年、当時のカザフスタンの首都アルマトゥ¹⁵⁾に移転した『レーニン・キチ』新聞社は、1980年代には日本製のオフセット印刷機の導入で出版体制の変革を迎えることになった。1980年代末には、ペレストロイカ期における少数民族の民族再生のための言論活動の活性化によって、『レーニン・キチ』がコリョ・サラムの活動の主な軸になってきた。すなわち、『レーニン・キチ』は記事(紙面)を通じて、コリョ・サラムの民族再生の流れに関する記事の掲載のみならず、それに問題意識を持ち批判的に報道し、問題に対する具体的な解決案を提示するようになってきた。『レーニン・キチ』は、刊行期間(1938年～1990年)の点からも、内容の側面からも、コリョ・サラム新聞の全盛期を謳歌したといえる。しかし、ペレストロイカがきっかけになった民族再生は、ソ連崩壊という出来事により下降線をたどるに至ったのである。

2.3. 『高麗日報』 *Корё ильбо*

『レーニン・キチ』社があったカザフスタンは、ソ連崩壊・共和国独立前後、政治・経済・社会などのすべての領域で変化を迎えた。自動的に『レーニン・キチ』も共和国間共同新聞からカザフスタン国内新聞に再編され、1991年にタイトルを『高麗日報』と改称し、日刊紙として発行されるようになった。『レーニン・キチ』社は、カザフスタン国内の政治・経済状況の変化により経済的な経営難と求人難で1989年から新聞の1面をロシア語で発行し始め、その後はハングルの1面以外は全部ロシア語となっていた。2016年現在、『高麗日報』社の職員は4人であり、週刊紙に再編され、カザフスタン文化情報省が国家財政から刊行する共和国新聞(Республиканскаягазета)として発行されている。カザフスタン国内の政治・経済・文化・社会のトピックで計16面の内、4面がハングルで発行されている。

『レーニン・キチ』は、1923年『三月一日』というタイトルで創刊され、その後、『先鋒(ソンボン)』、『レーニン・キチ』、『高麗日報』というタイトルの変遷を経て、90年あまりにわたって発行されている、現存する最も長く刊行されているコリアン・ディアスポラ新聞である。コリョ・サラムの歴史的故郷である極東からカザフスタンのクズルオルダとアルマトゥに本社を移転しながら、彼らの生活・慣習・伝統・歴史に関する情報と議論を取り上げてきた唯一の論壇であるといえよう。このように『レーニン・キチ』は、コリョ・サラムの歴史の命脈を保ち、民族のアイデンティティを守る原動力になってきたのである [Lee 2012: 9]。

14) ソ連共産党中央委員会の機関紙(1912年5月5日最初発行)であり、日本語に訳すると「真理」。

15) アルマトゥは、カザフスタンの旧首都である。カザフスタン政府は、1997年12月首都をアスタナ(Астана)に移転した。

III. 民族の再生を求めて

ベレストロイカを迎えて、コリョ・サラム社会はどう変わっていったのか。このことは、当時の『レーニン・キチ』の記事に明確に現れており、それらの記事を分析することによって、彼らがいつどのような状況に置かれていたかを把握することができるだろう。ここでは、ベレストロイカを生きたコリョ・サラム社会を、『レーニン・キチ』に掲載された民族再生に関する記事から検討したい。

記事分析の方法としては、まず、ベレストロイカ期に民族再生に関する記事が掲載され始めた1986年から1991年までの『レーニン・キチ』掲載記事につき、年別に「民族文化」、「民族歴史」、「アイデンティティ」というキーワードで分類できるものを抽出した。その結果、記事の分量が多い順番に「民族文化」、「民族歴史」、「アイデンティティ」となった。

それぞれを具体的に見てみると、第一の「民族文化」については、その再生のための活動についての記事が中心である。その中でも特に、言語や文化・芸術の再生に関する記事が多く見られた。言語についての記事は、1986年には計17回、1987年に37回、1988年に51回、1989年に83回、1990年に83回、1991年に75回掲載された[Lee 2012: 18–30]。また、文化・芸術については、1986年に3回、1987年に5回、1988年に47回、1989年に44回、1990年に148回、1991年に144回掲載された[Lee 2012: 31–59]。

二番目の「民族歴史」については、民族の歴史と記憶の再生が中心的課題である。コリョ・サラムの民族の歴史と記憶を再生する過程で最大のテーマは、「1937年の強制移住」であり、民族の歴史と記憶の再生はこのテーマから始まったといえる。関連記事は、1986年に9回、1987年に7回、1988年に25回、1989年に45回、1990年に89回、1991年に110回掲載された[Lee 2012: 60–78]。

三番目の「アイデンティティ」については、二番目とも重複する部分もあるが、アイデンティティの再構築に関する記事が、計83回を占めた。コリョ・サラムの極東への移住・定着から、中央アジアへの強制移住を経て形成されてきた彼らのアイデンティティの再構築に関する記事が掲載された[Lee 2012: 64]。その中で、コリョ・サラムのアイデンティティについて特に着目しておかなければならないのは、民族自治の要求とそれに向けての動きが見られたことである。民族自治の要求についての記事の分量は少ないが¹⁶⁾、それは、コリョ・サラムの自己認識¹⁷⁾とともに、この時期のコリョ・サラムのアイデンティティ再構築の帰結点になっていたと判断できる。従って、アイデンティティの再構築に関しては、その活動の帰結点となった民族自治の要求を中心に述べて行きたい。

1. 民族文化の再生

1.1. 言語

ベレストロイカの展開後、1988年に『レーニン・キチ』に「朝鮮語学習」コーナーが新たに設定された。このコーナーから、コリョ・サラムの母国語学習についての積極的な意思が反映され始めたといえよう。母国語学習を担当する機関が存在しなかった当時、「朝鮮語学習」コーナーというこの定期掲載欄は、その時期の母国語学習のスタート地点だったのである。

16) 1986年に4回、1987年に1回、1988年に3回、1989年に3回、1990年に6回、1991年に15回掲載された[Lee 2012: 72]。

17) 「コリョ・サラム」という名称についての議論の結果、北朝鮮でもなく、南の韓国でもなく、彼らは、「コリョ・サラム」であるという結論を得ることになった。それはベレストロイカ期の民族再生の動きが進むにつれ、コリョ・サラムの自己認識が高揚する過程で得られた結果であるといえる[강상호(カン・サンホ) 1990: 4]。

ソ連朝鮮サラム¹⁸⁾の言葉や文字、彼らの文学や芸術、文化の未来に対する耐えざる悩みが私を放さない。言葉がなくなったら、文学も、劇場も、新聞も全部なくなるだろう。ごく先日まで、こういうふうに話すと、それを民族主義の表現または、狭小な見解だと非難された。しかし現在は状況が変わった。朝鮮語を死ぬ前に生き返らせるべきだ。[한(ハン) 1988: 4]

1989年からは、母国語教育の必要性和重要性が強調され [리(リ) 1989: 4]、クラブ¹⁹⁾という地域の文化再生に関する活動を担当する団体が結成された [이뜨루마노브(イ・トルタノフ) 1989: 4]。ひいては母国語教育の現実的な問題が取り上げられるようになった。たとえば、母国語教育の実施における教員、教授法、教材などの劣悪な環境が扱われ、海外に居住している同胞とのコミュニケーションのため、統一的で単一化された母国語教育が実施されるべきだと強調された [심(シム) 1989: 4]。また、このような問題を解決していくための全般的・総合的な団体の設立、いわゆる民族文化センター設立の必要性がしばしば言及されてきた [막(パク) 1988: 4]。

1990年には、母国語教育の問題点の解決案が具体的に記事化され、そこではコリョ・サラムの主體的・積極的な視座を見て取ることができる。たとえば、母国語教育における持続的な学習システムを備えた教育機関の必要性が言及され [히(ホ) 1990: 4]、教員、教授法、教材などの不足は祖国²⁰⁾との連携を通じて解決せよとの主張が見られた [강(カン) 1990: 4]。しかし一方で、韓国および北朝鮮との交流が頻繁になっていくにつれ、コリョ・サラムの言葉と文字が、両国とは異なることが確認され、それを統一させるために学術的研究機関を通じて言葉と文字を共同管理するべきだという記事 [홍(ホン) 1991: 4] もあったのである。

1991年には、前述したような解決案に対する努力が蓄積され、シムケント(Шымкент)市のコリョ・サラム文化センター [오를로브(オルロフ) 1991: 4] やカザフ総合師範大学の韓国語学科の創設 [정(ジョン) 1991: 1] を始め、各地で母国語講習のための大小の団体が結成され始めた [Lee 2012: 51]。その後、各団体を統括するコリョ・サラム文化センターや、韓国との交流の結果、アルマトゥに韓国教育院が設立され [김(キム) 1991: 1]、コリョ・サラムの言語学習や文化活動を担当することになった。1991年には、韓国教育院で韓国語講座が開設され、学生・大学生・一般のクラスに分かれて授業が行われ始めた。

1.2. 文化・芸術

ベレストロイカにおいて1988年に差し掛かった頃から、民族文化の再生の動きが高まった。各地で続々と組織された文化団体の活動を全国的に統合・運営するための「文化センター(культурныйцентр)」という文化団体が組織され、民族文化の再生のための活動がより体系的に進行し始めた [막(パク) 1988: 4]。このような団体の活動は、1988年のソウル・オリンピックや韓ソ国交正常化(1990年9月30日)をきっかけに、より活発化した。たとえば、歴史上初めて「1937年

18) 1990年代以前には紙面上に、「朝鮮人」または「朝鮮サラム」の単語が混用されていた。1988年のソウル・オリンピック、1990年の韓ソ国交正常化、1991年のソ連崩壊を経ながら、名称についての議論が始まった結果、「コリョ・サラム」という名づけが定着したのである。これに関する記事は、1990年12月23日掲載の「우리는 누구인가(我々は何者か)」を参照。

19) 英語 club の当て字である「俱樂部(구락부)」のハングルの発音であり、日本語だとクラブである。

20) 新聞の紙面上には、祖国という概念が、韓国と北朝鮮の双方に対して混用して言及されているが、1988年のソウル・オリンピックからコリョ・サラムと韓国との交流が始まると、両国の経済的な状況との関連から、よりよいイメージをもつことになった韓国を指して称することが多くなった。しかし、カン・ヴラジーミルの記事によると、彼は、祖国との連携に関する言及で、「南朝鮮、北朝鮮両国との有機的な連携」を強調したのである [강(カン) 1990: 4]。

の強制移住」をテーマにした演劇 [이아나스따씨야(イ・アナスタシヤ) 1988: 4; 카스따그(カスタグ) 1990: 4] が上演された。関連記事は以下のように述べている。

カザフ共和国国立朝鮮劇場の演劇「37年の通過列車」の初演から、歴史の新しいページが書き加えられたのである。ゾン・ヴラジーミル作のこの演劇は、在ソ朝鮮人が極東から中央アジアとカザフスタンへ強制移住させられたテーマをはじめて舞台にのせた。社会問題に対する鋭い批判と苦しんだ人々の運命を見せた。演劇は、スターリンの下での民族の痛みを癒したのである。 [이아나스따씨야(イ・アナスタシヤ) 1988: 4]

また「朝鮮民族文化の日」、「お正月の迎え」、「伝統婚礼式」、「シルム²¹⁾ 競技」などの民族文化行事が多様な団体を中心に行われた。1990年には、民族文化の基盤が1世・2世に比べて弱いコリョ・サラム子孫の、民族文化に対する意識を促す記事が見られるようになってきた [김원진(キム・ウォンジン) 1990: 4]。

一方、出版物に関連した記事で目立つのは、既存の出版物のほとんどは文学作品であったが、この時期には、コリョ・サラムのアイデンティティ [김계르만(キム・ゲルマン) 1989: 4]、歴史、韓国・北朝鮮に関する書籍が出版されるという変化が生じたことである。1990年代から活発になった韓国との交流のため、民族文化関連の全分野の記事量は急激に増加した [윤기영(ユン・ギヨン) 1990: 4; 남(ナン) 1991: 4; 김계오르기(キム・ゲオルギ) 1990: 4; 아 올로르프(オルロフ) 1991: 4]。韓国と連帯した展示会・音楽会・体育会・映画会などの文化交流が活発に行われ、韓国と北朝鮮を理解する彼らの観点は変化し始めた。ペレストロイカ期に、民族文化の再生は、初期には若干の知識人によって体系化される流れが生じ、1990年代に入ると、そうした活動が多様な団体によって主体的・組織的に行われるようになった。

2. 民族の歴史と記憶の再生

民族の歴史と記憶の再生という観点から最大のテーマは、「1937年の強制移住」である。民族の歴史と記憶の再生はこのテーマから始まったといえる。1920年～1930年代に極東コリョ・サラム社会は、慣習や伝統を形成した経済的・政治的・社会的ポテンシャルを蓄積してきた共同体であった。極東には数十の集団農場、コリョ・サラム住居地及び農村ソビエトが組織されたのであり、彼らは、社会組織の活動に積極的に参加しつつ生を営んでいたのである [Lee 2012: 70]。

しかし、1937年の強制移住という事件から彼らの歴史は大変革を経験することになったのである。強制移住は、約2500人のコリョ・サラム・エリートに対する大弾圧とともに、1860年代以来、コリョ・サラム社会が様々な困難に打ち勝ち積み上げたあらゆる政治・経済・社会・文化的成果に対する破壊的な行為であった [윤(ユン) 2005: 591]。コリョ・サラムは、ロシア革命やソビエト建設に貢献したにもかかわらず、試練の時間を耐え抜かなければならなかった。ついに、スターリン死後、フルシチョフがスターリン批判を行った1956年以降、コリョ・サラムに徐々に政治的復権や自由が許可され、ペレストロイカ以降は民族文化の再生を行うことになったのである。従ってコリョ・サラムは「1937年の強制移住」についても言及が可能になったのである。

ペレストロイカ以前には「強制移住」については言及さえ不可能であったが、1988年に至ってようやく強制移住に関する記事が、歴史上初めて『レーニン・キチ』紙上で記事化されたのである [김

21) 日本の相撲のような朝鮮の伝統的な民族競技の一つである。

익도르(キム・ヴィクトル)1988: 2]。朝鮮半島から沿海州への移住から始まるコリョ・サラムの一般的な歴史に触れ、部分的な言及であったが、「強制移住」についての初めての記事であった。その時から、強制移住や粛清関係の記事がたびたび掲載されるようになった。1989年の最初の記事以降、強制移住関連記事の量は目に見えて増えた²²⁾。

事実は歪曲されてはならない。極東から強制的に移住させられたコリョ・サラムは、どこへ何のために行かされるのかも知らずに、粗末な貨物列車に乗せられて送られた。コリョ・サラムの移住は、コリョ・サラムが日本のスパイだとみなされたためだと説明されたが、我々が尊敬していたチョ・ミョンヒ、パク・チャンネ、カン・ビョンゼ、リ・ジョンズなどがなぜ罪もなく日本のスパイという汚名をきせられ犠牲にされたのか。(中略)ここに来てから我々のパスポートには、居住地制限という印が押してあった。移住民の子供たちは自由に勉強もできなかった。ソ連軍に服務する権利も、祖国戦争²³⁾に参加する権利も与えられなかった。[송(ソン)1989: 4]

内容のほとんどは移住の過程、移住の理由、移住後の定着の過程についての経験者の証言による記事で、回想や、あるいは調査結果の形をとるものもあった[劉1991: 25]。その後、前述したように「スターリンへの手紙」、「37年の通過列車」などのような強制移住を題材にした演劇や公演が上演され始めたのである。いうまでもなく、「37年」というのは、強制移住以降50年あまりの間の不当な弾圧と苦しみの出発の年であり、それゆえ、彼らにとっては自らを再認識する上で最も重要な起点であるといえよう。強制移住についての関心とともに強制移住の移住元であった極東についての関心も同時に高まり、1988年から極東の経済的な展望に関する記事が掲載され始めた[카르보(カルボヴァ)1989: 4]。

3. 民族自治の要求

ここまで『レーニン・キチ』から見えてきた諸活動は、全体として固有の民族文化再生・維持・発展を目指す、いわゆる文化的自治の実現のためだったといえよう。これに対してここでいう「民族自治」とは、その文化的自治のより安定的・効果的実現を保障しつつ、さらに民族の政治・経済的生活の向上をもたらすものとして考えられる、いわゆる領域的自治を指すが、これに関しては、コリョ・サラムは、民族にとっては領域が不可欠であることの正当性を主張したのである[아사드(アサドゥリン)1990: 2]。

自分の領土を持っていない民族は何を信じて生きるか。我々はソ連で43万人に達する。人口で見るとは、政治・思想・文化・科学・技術などの各分野のレベルで見るとは、コリョ・サラムは自治共和国を形成できる民族だと信じている。自治領土がなくては、言語研究、文化、民俗、伝統の再生は空論である。もしコリョ・サラム自治共和国を極東沿海州に設置するならば、首都はウスリースク²⁴⁾に定めるのがいい。なぜならば沿海州は朝鮮半島と境を接し

22) 1988年に計15回、1989年に計13回、1990年に計39回、1991年に計8回掲載された[Lee 2012: 70-73]。

23) 正確には大祖国戦争。ソビエト連邦がナチス・ドイツ及びその同盟国と戦った戦争(1941年6月22日～1945年5月9日)、一般的には第二次世界大戦を指す。

24) Уссурийск, 沿海州の西南部地方の都市

ているので、経済、科学技術、文化などの莫大な援助を受けられるからである。[강이남(カン・イナム)1990: 4]

上のように、カン・イナムは、コリョ・サラム自治州創設問題は、1989年11月ソ連邦最高会議で提議され、コリョ・サラムは強制移住の時に廃止された極東沿海州のコリョ・サラム民族地区を復活させるべきだというロジックで自治州設立を要求した。候補地としては、極東が取り上げられた。極東に自治州を建設させようという動きは1990年代から活発になり、人々の意識を促すに留まらず、制度や方法についての具体的な案も提示されたのである。たとえば、ウ・ヴラジーミルは、次のように主張していた。

「民族に関する法令」に依拠し、ソ連でコリョ・サラム自治州の創設が実現できる。そうだとすれば、自治州はどこが最もいいのか？多様な意見があるが、私は極東が最もいい地域だと思う。しかし、地域を選定する過程では各地域に居住しているコリョ・サラムの意見を収斂すべきである。それに留まらず、予定された候補地の住民の過半数の賛成が求められる。また、それについての投票が必ず行われるべきである。[우(ウ)1991: 2]

スターリンの名高い定義によれば、「民族とは、言語、地域、経済生活及び文化の共通性のうちにあらわれる心理状態の共通性を基礎として生じたところの歴史的に形成された、人々の堅固な共同体」[劉 1991: 27]であり、「地域」は、ソ連の民族にとって不可欠な4つの要素のうちの一つのだが、ほかならぬこのスターリンによってコリョ・サラムは「地域」から強制的に切り離されてしまった。いわば民族としての存在を否定されていたコリョ・サラムが、自らを回復する過程のなかでこの失われた「地域」の回復を要求するにいたった。それにあたって、歴史的故郷がどこに求められたのかは、コリョ・サラムのアイデンティティのあり方と結びついた、きわめて興味深い問題である。

IV. おわりに

本論は、コリョ・サラムの新聞である『レーニン・キチ』の分析を事例に、ペレストロイカ期における民族再生に関する言論活動を考察してきた。ペレストロイカ以降、コリョ・サラム社会は変化し、その中での主な流れは、その時期『レーニン・キチ』記事の分析から明らかとなったように、三つの流れに、すなわち、民族文化の再生、民族の歴史と記憶の再生、民族自治の要求とそれに向けての動きにあった。ペレストロイカ期に活発に展開されてきたコリョ・サラムの民族再生の動きは、自己認識の高揚と自治の要求に帰結されたといえるだろう。その中で、民族自治は実現されはしなかったが、紙上での議論から始め、世論化されたことに意義があるといえるだろう。この時期の彼らの民族再生に向けての主な形態は、かなりの程度一体的で主体的・積極的対応だったといえる。

本論の事例では、ペレストロイカ期に生じた民族再生の潮流に対するコリョ・サラム社会の主体的な対応に焦点を当ててきた。本論でのペレストロイカ期のコリョ・サラム社会への着目は、コリョ・サラム社会の変容の全体像を捉えるための出発点と位置づけられるといえるだろう。

ソ連崩壊後、旧ソ連のいずれかの国の国籍を持つことになったコリョ・サラムは、諸国政府の主幹民族中心の国民統合に対し、多様な対応をしながら生を営んでいる。彼らの対応の形態は、各国の国民統合過程やコリョ・サラム社会の変容、双方の関係性やコリョ・サラム社会と他民族間の関

係性など多角的な観点から、綿密な分析が求められていくべきであろう。今後、本論が着目したペレストロイカ期のコリョ・サラム社会の対応に加えて、各国の独立以降の諸情勢と密接に関わったコリョ・サラムの対応にも焦点を当てて、より多層的なコリョ・サラム社会のあり方を探求していきたい。

その一方で、本論で触れたように、コリョ・サラムについての情報が多くなると同時に、コリョ・サラムが一枚岩的な存在ではなく、韓国や北朝鮮と異なる言語や文字が存在すること、また、移住時期及び出身地域によるコリョ・サラムのサブカテゴリーが存在することが徐々に明らかとなり、認識され始めた。特にコリョ・サラム社会に存在するサブカテゴリーは、現代コリョ・サラム社会、すなわち各国に属しているコリョ・サラム社会の動態を研究する際には、重要な意味を持つと考えられ、今後より深く検討・分析していくべきだと考えている。

参考文献

- 岡奈津子 1998 「ソ連における朝鮮人強制移住——ロシア極東から中央アジアへ」『岩波講座世界歴史 24 解放の光と影 1930年代-1940年代』岩波書店, pp.65-88.
- 木村英亮 1993 『スターリン民族政策の研究』有信堂高文社.
- クージン, A. T. 1998 『沿海州・サハリン近い昔の話——翻弄された朝鮮人の歴史』(岡奈津子・田中水絵訳) 凱風社.
- 高全恵星 2007 『ディアスポラとしてのコリアン——北米・東アジア・中央アジア』新幹社.
- 高橋清治 1990 『民族の問題とペレストロイカ』平凡社.
- ナハイロ, ボフダン, ヴィクトル・スヴァボダ 1992 『ソ連邦民族・言語問題の全史』(田中克彦監、高尾千津子・土屋礼子訳) 明石書店.
- 半谷史郎, 岡奈津子 2006 『中央アジアの朝鮮人——父祖の地を遠く離れて』(ユーラシア・ブックレット 93) 東洋書店.
- 劉孝鐘 1991 「在ソ高麗人の歴史と現状——『民族自治』をめぐる」現代語学塾『レーニン・キチ』を読む会(編訳)『在ソ朝鮮人のペレストロイカ』凱風社, pp.20-39.
- 李愛俐娥 1999 「カザフスタンの独立と朝鮮人社会の変化」『中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響 1998年調査報告書』(JRAK 調査報告書 7) 日本カザフ研究会, pp.57-92.
- 2002 『中央アジア少数民族社会の変貌——カザフスタンの朝鮮人を中心に』昭和堂.
- 和田春樹 1990 『ペレストロイカ成果と危機』岩波書店.
- 고송무(ゴ・ソンム) 1990 『조선의 한인들(ソ連の韓人)』이론과 실천.
- 김근태(キム・ギョント) 2015 『우즈베키스탄 고려인의 이주와 삶(ウズベキスタン・コリョ・サラムの移住と生)』글누리.
- 김상철(キム・サンチョル) 2012 「카자흐스탄의 인구사회학적인 카자흐화 정책과 재외카자흐인(오랄만)의 카자흐스탄 이주(カザフスタンにおける人口社会学的なカザフ化政策と在外カザフ人(オラルマン)のカザフスタン移住)」『민족연구(民族研究)』52(0), pp. 112-146.
- 김필영(キム・ピリョン) 2004 『중앙아시아 소비에트 고려인 문학사(中央アジアソビエト高麗人文学史)』강남대학교출판부.
- 김호준(キム・ホジュン) 2013 『유라시아고려인(ユーラシア高麗人)』주류성.
- 윤병석(ユン・ピョンソク) 2005 「소비에트 건설기의 고려인 수난과 강제이주(ソビエ트建設期の

- 高麗人の受難と強制移住)』『中央史論』21, p.591.
- 임영상(イム・ヨンサン)2011「재외한인사회와 디지털콘텐츠(在外韓人社会とデジタルコンテンツ)」『재외한인연구(在外韓人研究)』23, pp.101-125.
- 정진아(ジョン・ジナ)2011「연해주·사할린 한인의 삶과 정체성(沿海州·サハリン韓人の生とアイデンティティ)」『한민족문화연구(韓民族文化研究)』38, pp.391-421.
- Ginsburgs, George. 1976. "The Citizenship Status of Koreans in the U.S.S.R: Post-World War II Developments," *Journal of Korean Affairs* 6(1), pp. 1-16.
- Kho, Songmu. 1987. *Koreans in Soviet Central Asia*. Helsinki: Finnish Oriental Society.
- Kim, German. 2003. *Korean Diaspora in Kazakhstan*. Sapporo: Slavic-Eurasian Research Center.
- Kim, German, King Ross (eds.). 2001b. "Koryo Saram: Koreans in the former USSR," *Korean and Korean American Studies Bulletin* 12(2/3), pp. 19-45.
- King, Ross. 2001a. "Blagoslovennoe: Korean Village on the Amur, 1871-1937," *The Review of Korean Studies* 4(2), pp. 133-176.
- Lee, Jinhye. 2012. *A Study on Establishing a Museum Based upon Lenin Gichi's Articles from 1986 to 1991*. Hankuk University of Foreign Studies Knowledge Press.
- Oka, Natsuko. 2000. "Deportation of Koreans from the Russian Far East to Central Asia," in Komatsu, H. et al. (eds.), *Migration in Central Asia: Its History and Current Problems* (Japan Center for Area Studies (JCAS) Symposium Series 9), Osaka: Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, pp.127-145.
- Stephan, J. J. 1978. *The Russian Fascists: Tragedy and Farce in Exile, 1925-1945*. London: Hamish Hamilton.
- . 1992. "Cleansing the Soviet Far East, 1937-1938," *Acta Slavica Iaponica* 10, pp. 43-64.
- . 1994. *The Russian Far East: A History*. Stanford: Stanford University Press.
- Wada, Haruki. 1987. "Koreans in the Soviet Far East, 1917-1937," in Dae-Sook Suh (ed.), *Koreans in the Soviet Union*, Honolulu: Center for Korean Studies, University of Hawaii, pp.24-59.
- Джарылгасинова, Р.Ш. 1960. Когурёсцы и их роль в сложении корейской народности. СЭ. №5.
- . 1969. Корейская национальная одежда в коллекциях. МАЭ. Сб. МАЭ. Т. 25.
- Ионова, Ю.В. 1960. Корейская деревня в конце XIX-XX вв. Историко-этнографический очерк. Труды института этнографии Новая серия. М.
- . 1964. Ценное поступление музея антропологии и этнографии ширма Корейская. Сборник МАЭ. Т. 22.
- . 1968. К вопросу о культе медведя, пещер и гор у корейцев. Страны и народы Востока. Вып. 6. М.
- . 1969. Религиозные воззрения корейцев. Сборник МАЭ. Т. 25.
- Ким, Бен Хак. 2013. Корё ильбо 90 лет. Корё ильбо.
- Ким, Г.Н. 2000. КОРЕ САРАМ: историография и библиография. Алматы Казак университети.
- Левин, М.Г. 1949. Антропологический тип корейцев. Краткие сообщения Института этнографии. Т. VIII. М, Л.
- . 1958. Этническая антропология и проблема этногенеза народов Дальнего Востока. М. Труды института этнографии Новая серия. Т. 36.

『레닌기치(レーニン・キチ)』(1986 年~1990 年)・『고려일보(高麗日報)』(1991 年)

- 강블라지미르(カン・ヴラジーミル) 1990(3 월 2 일)「독자의 편지: 몇 가지 의견(読者の手紙—いくつかの意見)『레닌기치』 p.4.
- 강상호(カン・サンホ) 1990(12 월 23 일)「우리는 누구인가? 우리는 ‘고려사람’(我々は何者か? 我々は「コリョ・サラム」である)」『레닌기치』 p.4.
- 강이남(カン・イナム) 1990(8 월 15 일)「재소고려인들의 자치제에 대하여(在ソコリョ・サラムの自治制について)」『레닌기치』 p.4.
- 김게르만(キム・ゲルマン) 1989(8 월 10 일)「서평: 소련조선인에 대한 서적(書評—ソ連朝鮮人に関する書籍)」『레닌기치』 p.4.
- 김게오르기(キム・ゲオルギ) 1990(11 월 8 일)「태권도가 널리 보급되고 있다(テコンドーが広がっている)」『레닌기치』 p.4.
- 김원진(キム・ウォンジン) 1990(2 월 6 일)「독자의 투고: 조선문화를 되살리자(読者の投稿—朝鮮の文化を守ろう)」『레닌기치』 p.4.
- 김웁뜨르(キム・ヴィクトル) 1988(8 월 5 일)「소련의 조선인들(ソ連の朝鮮人)」『레닌기치』 p.2.
- 김춘순(キム・チュンスン) 1991(8 월 27 일)「뜻 깊은 사변, 커다란 기대: 알마아따 한국 교육원 개원(意義深い事—アルマ・アタ韓国教育院開院)」『고려일보』 p.1.
- 카르보와, 예(カルボヴァ, E) 1989(1 월 27 일)「독자의 편지: 극동의 전망(読者の手紙—極東の展望)」『레닌기치』 p.4.
- 남경자(ナン・ギョンジャ) 1991(6 월 26 일, 7 월 23 일, 25 일)「소련동포합동전통혼례식(ソ連同胞合同伝統婚礼式)」『레닌기치』 p.4.
- 리창당(リ・チャンダン) 1989(8 월 2 일)「언어는 민족문화발전의 기본수단이다(言語は民族文化発展の基本手段である)」『레닌기치』 p.4.
- 박보리쓰(パク・ヴォリス) 1988(9 월 6 일)「조선인들의 문화중앙은 반드시 있어야 한다(朝鮮人には文化中央が必ず必要である)」『레닌기치』 p.4.
- 송희현(ソン・히ョン) 1989(8 월 17 일)「이것은 변명할 수 없다(これは言い訳ができない)」『레닌기치』 p.4.
- 심수철(シム・스츨) 1989(6 월 27 일)「독자의 의견: 조선어를 어떻게 연구할 것인가(読者の意見—朝鮮語をいかに研究するか)」『레닌기치』 p.4.
- 아싸둘린, 예프. 아. (Асадурин, Ф. А.) 1990(2 월 13 일)「학자의 의견: 소련조선사람들에게 자치령토가 있어야 한다(学者の意見—ソ連コリョ・サラムには自治領土があるべきだ)」『레닌기치』 p.2.
- 오를로브, 아. (オルロフ, А) 1991(5 월 7 일)「모국의 문화, 전통, 의식을 잃지 말자(母国の文化・伝統・儀式を忘れないように)」『고려일보』 p.4.
- 우블라지미르(ウ・ヴラジーミル) 1991(3 월 21 일)「민족재생에로의 길은 자치주창건이다(民族再生への道は自治州創建である)」『고려일보』 p.2.
- 윤기영(ユン・ギョン) 1990(2 월 27 일)「한국의 상품 전시회(韓國の商品展示会)」『레닌기치』 p.4.
- 이뜨루따노브(イ・トルタノフ) 1989(9 월 1 일)「조선인구락부의 첫 걸음(朝鮮人クラブの初歩)」『레닌기치』 p.4.
- 이아나쓰따씨야(イ・アナスタシャ) 1988(10 월 13 일)「스탈린에게 보내는 편지(スターリンへの手紙)」『레닌기치』 p.4.

- 자필까썌모프, 아.(ジャリルカシモフ, A) 1991 (1월 23일) 「언어는 인민의 심혼(言語は人民の心魂)」 『고려일보』 p.4.
- 정석 (ジョン·sock) 1991 (8월 27일) 「모국어재생을 위해 고송무교수가 왔다: 카자흐사범대학 한국어학과 파견 (母国語再生のためにゴ・ソンムが来た——カザフ総合師範大学の韓国語学科に派遣)」 『고려일보』 p.1.
- 카스타그 (カスタグ) 1990 (1월 4일) 「37년 통과열차 (37年の通過列車)」 『고려일보』 p.4.
- 綱진 (한·진) 1988 (9월 21일) 「문제와 의견: 조선말을 되살리자 (問題と意見——朝鮮語を生き返らせよ)」 『레닌기치』 p.4.
- 허알렌진 (ホ·ヴァレンチン) 1990 (8월 4일) 「독자의 의견: 모국어 연구의 문제 (読者の意見——母国語研究問題)」 『레닌기치』 p.4.
- 홍기 (ホン·기) 1991 (4월 11일) 「말과 글을 공동 관리(言葉と文字を共同管理せよ)」 『고려일보』 p.4.